びわこ文化公園植物だより〔β版〕

イロハモミジ ムクロジ科

・学名　*Acer palmatum*
・園内各所に植栽

　秋晴れの青空に真っ赤に色づいた紅葉が美しく、目を楽しませてくれます。すっかり秋も深まってきました。サクラの仲間は早々に落葉し、モミジバフウやプラタナスもかなり葉が減ってきました。コナラやクヌギも色づき始め、秋も後半に入った

ことを知らせてくれます。そんな中、美しい紅葉を見せてくれるのはイロハモミジを中心としたカエデ類です。文化公園の芝生広場や池の周囲など、色の種類を数え上げたくなるほど様々な色合いで目を楽しませてくれます。

　イロハモミジは、タカオカエデ、イロハカエデ、タカオモミジなど様々な別名があり、広く親しまれています。4-9cm の長さの葉を持ち、掌状に 5～9 裂するのが特徴です。葉の形が蛙の手に似ているので「かへるで」、後に「カエデ」と呼ばれたようです。カエデの仲間で葉が手のひらのように切

れ込んだものは、全て「かへるで」と呼びます。「モミジ」は、秋に草木が赤や黄色に変わることを「もみつ」や「もみづ」といい、その動詞を名詞化した「もみち」が語源になっています。平安時代に濁音化されて「もみぢ」となりました。

　文化公園には、イロハモミジに似た種類で「オオモミジ」も楽しむことが出来ます（上の写真右）。イロハモミジ（上の写真左）より葉が大型で、葉の縁の鋸歯（ギザギザ）が揃っているのが特徴です。オオモミジによく似た「ヤマモミジ」はオオモミジと同じくらいのサイズの葉を付けますが、葉の縁の

鋸歯が不揃いです。寒い地域では、オオモミジは太平洋側に多く、ヤマモミジは日本海側に多い傾向があります。葉が掌状に切れ込むカエデ類は、コハウチワカエデ、ヒナウチワカエデ、オオイタヤメイゲツなど他にもありますが、7～11 裂して「かへるで」というよりは「うちわ」が適切な名前かも知れません。「イロハモミジ」と「オオモミジ」以外の「かへるで」は、文化公園では見られないようです。

名前の話が続きますが、最後に分類の話に触れておきます。生物の名前は、地域ごとにさまざまに呼ばれます。多くの図鑑に出てくる「イロハモミジ」ですが、関西では「タカオカエデ」と呼ぶ方が多いかも知れません。中国で「雞爪槭」、韓国で「단풍나무」と呼ばれるので、名前だけ聞いたら、それらが同じ種なのか違う種なのか、よく分かりません。生物には万国共通の名前である学名が付けられています。イロハモミジの場合は、”*Acer palmatum*”です。ラテン語の 2 つの単語からな

り、最初の”*Acer*”は属名という生物の分類を、次の”*palmatum*”は種小名と呼ばれ、その生物種の特徴を示します。”*Acer palmatum*”は、「手のひら（*palmatum*）の形をしたカエデ属（*Acer*）の植物」という意味です。

研究が進むことで分類学上の生物種の位置づけも少しずつ変化するのですが、馴染みのある生物の分類も変化しています。分類が変化すると学名も影響を受けます。遺伝子 DNA を用いて分類を見直したことで、大きく分類体系が変化しました。カエデ属はカエデ科（Aceraceae）に分類されていたのですが、最近の分類ではムクロジ科（Sapindaceae）になりました。20 世紀に学んだ私には違和感が残るのですが、新しい考え方を吸収しなくては。これから植物を勉強される方は、新しい分類の図鑑で勉強して下さい。

（龍谷大学先端理工学部環境生態工学課程・
横田岳人）